九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

岡村繁先生を偲んで

桐島, 薫子
筑紫女学園大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/1650639

出版情報：中国文学論集. 44, pp.43-45, 2015-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

岡村　繁先生を偲んで

平成二十六年十二月二十八日、お元気だった岡村 繁先生の突然の訃報に接し、まだ、心の整理ができぬままではありましたが、謹んで、久留米大学大学院でご指導頂いた門下生を代表し、先生との思い出をたどりながら、最後のお別れを申し上げました。今回、その時の弔辞を基に、先生が門下生への激励にとお示し下さった漢詩や、久留米大学で取り組まれた公開講座のことなどを加え、改めて追悼の文を記したいと思います。

大学院の演習の講義では、江戸時代の詩人・広瀬旭荘（一八〇七～一八六三）の『梅墩詩鈔』の作品解釈に取り組みました。講義には、先生の学問やお人柄を慕い、県内外はもとより、中国からも院生が集まって来ていました。期待と不安を抱く院生たちに、先生は、旭荘の兄広瀬淡窓（一七八二～一八五六）の詩「桂林荘雑詠、示諸生四首二（桂林荘雑詠、諸生に示す　四首二）」をお示し下さいました。今、先生のご著書である江戸詩人選集第九巻『広瀬淡窓・広瀬旭荘』に拠り、その詩をご紹介します。[1]

休道他郷多苦辛　　道うを休めよ　他郷　苦辛多しと
同袍有友自相親　　同袍　友有り　自ら相親しむ
柴扉暁出霜如雪　　柴扉　暁に出づれば　霜雪の如し
君汲川流我拾薪　　君は川流を汲め　我は薪を拾わん

（訳）

塾生たちよ、「他郷ではつらいことが多い」などと弱音は吐くまいぞ。一枚のどてらを貸したり借りたりしながら

追　悼　岡村　繁先生

ら共に厳しい寒さをしのいでこそ始めて友だちというものができ、かくして自然と互いに親密になってくるものだ。ところで今朝、東の空が明けそめるころ、柴のしおり戸をあけて外に出てみると、まるで雪のように一面真っ白に霜が降りているが、さあ、君は小川の流れに水を汲みに行きたまえ、私は林に薪を拾いに行こう。

演習での先生のご指導は厳しく、発表者をはじめ、受講生は、皆、緊張していましたが、一息ついた時は、お茶と和菓子を頂きながら、先生のお話を聞くのが、とても楽しみでした。お菓子代は、いつも先生が出して下さいました。ところが、ある時、「お菓子を食べ過ぎた！」と、先生がおっしゃったので、講義の後、私たちは話し合い、次回からは配る個数を決め、残った分は先生が見えない所に置いておくことにしました。お菓子が大好きでいらした先生には、大変申し訳ないことをしてしまいましたが、「先生には、いつまでも健康でいて頂きたい。」皆、そのように思っていたのです。

現在、中国古典の学びを広く社会に向けて発信していくことは、非常に重要になっていますが、当時から、岡村先生は大学の講義のみならず、一般の方々を対象にした公開講座でもお話をされていました。例えば、一九九二年には、文学部長としてご多忙な中、「九州学を楽しむ」を主要テーマとする公開講座で「広瀬旭荘の漢詩」という講座名でお話をされています[2]。岡村先生の公開講座には多くの方々がお出でになり、熱気を帯びた会場からは、たくさんの質問が出ました。先生は一つ一つの質問に丁寧に答えておられました。そして、講座の後、「勉強していて良かった。」とおっしゃっていました。

このように先生は「勉強する」という言葉を、よくお使いになっていたように思います。そして同時に「勉強する」姿勢も、私たちにお示し下さいました。それは例えば、幾多のご著書や論文の他、「労を惜しまず原典に戻って調べる。」というお言葉や、先生が原稿用紙に書き込まれた一文字一文字から、染み入るように伝わってくるものでした。

私たちは、良き師に巡り逢えてほんとうに幸せでした。今後、先生から教えて頂いたことを伝えていけるよう、一生懸命、精進して参りたいと思います。

悲しみは深うございますが、お別れに際しましては、ご生前、先生のご自宅に伺った時、帰り際には、暑い日も寒い日も、いつも玄関の外まで出て来られ、私たちが見えなくなるまで両手を大きく振って見送って下さった、あの慈愛溢れるお姿を、いつまでも思い浮かべていたいと思います。

岡村先生、有り難うございました。どうぞ、安らかにお眠り下さい。

注

（1）岩波書店、一九九一年、五七～五八頁。

（2）この他、岡村先生が担当された公開講座には、「江戸時代の九州の漢詩人たち」（一九九二年）、「僧大潮と近世九州の漢詩壇」（一九九三年）、「李白の生きかた」（一九九三年）、「老いは楽しく――中国古代の死生観」（一九九六年）がある（久留米大学ホームページ「公開講座バックナンバー」参照）。また、公開講座を基にまとめられた論考には、「僧大潮と近世九州の漢詩壇」（堂前亮平・狩野啓子編『九州学を楽しむ』所収、おうふう、一九九四年）一二三～一四二頁、「老いは楽しく　中国古代の死生観」（野中共平・的場恒孝編『生きることの美しさ』所収、石風社、一九九七年）一六三～一八七頁がある。

桐島薫子

追悼　岡村　繁先生